

第8章

恵泉女学園大学

人間社会学部フィールドスタディプログラム：
専門性をもった教養教育によるグローバル市民の育成

大橋正明（恵泉女学園大学）

◆ 実施期間

1999年度から現在に至る

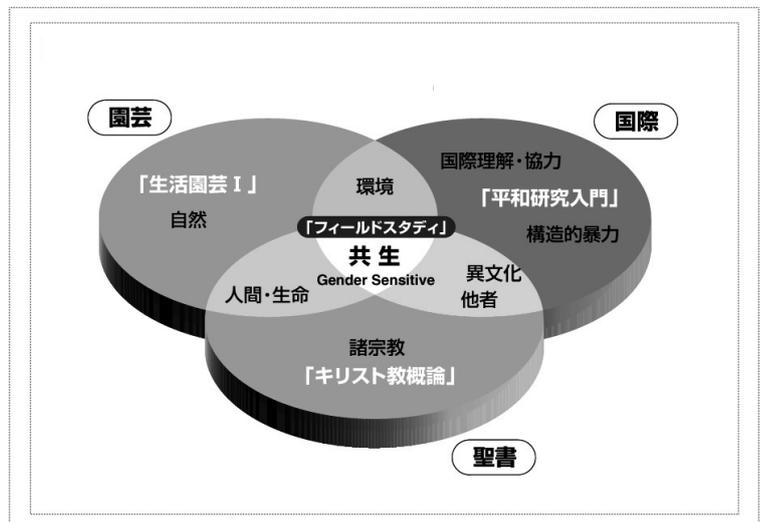
1. プログラムの背景と目的

恵泉女学園は、一人のキリスト教信徒、河井道によって、1929年(昭和4年)に東京で設立された。河合はその著書の中で、この学園の建学の理念と具体的な科目について以下のように述べている。「戦争は婦人が世界情勢に関心を持つまでは決してやまないであろう。それなら、若い人たちから—それも、少女たちから始めることである。(中略) わたしの頭の中には、普通のカリキュラムに、キリスト教と園芸及び国際というような新しい科目を加えた高等女学校の構想がだんだんと形を成してきた。」

1988年に開学した恵泉女学園大学は、このキリスト教、園芸、国際という建学理念に従って、その学則第一条に、「真理と平和を愛し、国際的視野に立って文化の進展と社会の福祉に貢献する有為な女性を育成することを目的とする」と定めている。実際、本学におけるカリキュラムはこの三本柱を色濃く反映しており、例えば共通基礎科目の多くは、「キリスト教」、「生活と園芸」、「平和と社会」に整理されている他、一年生はキリスト教入門、生活園芸、平和研究入門の三科目12単位が必修となっている。

このフィールドスタディプログラムは、この三本柱を大学として諸宗教、自然、国際理解・協力を読み替えた上記図1の中心部分に位置しており、平和を愛し、国際的視野に立って国際社会の福祉に貢献する女性の育成という学園の目的に沿ったものである。さらに特定するならば、学則一条の6にある人間社会学部の目的である「主体的に変化に対応し得る幅広い視野や総合的な判断力、実践的な問題分析能力や問題解決能力を兼ね備えた人材の養成を目指すことにより、平

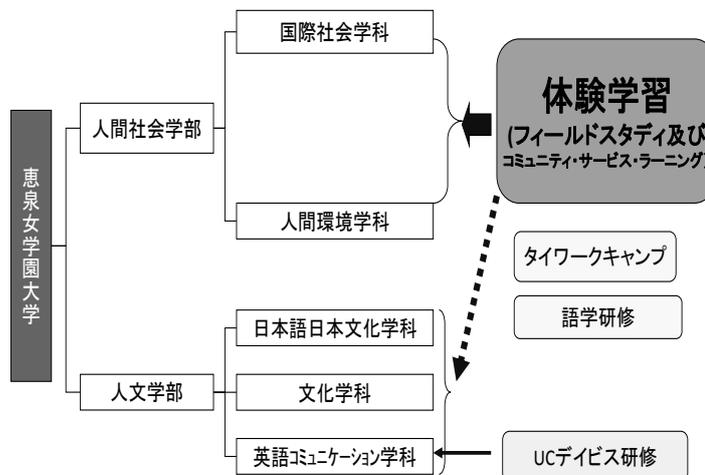
図1：建学の理念とフィールドスタディの位置関係



和及び地域社会・国際社会への貢献を果たすこと」を、現場体験を通じて直截に目指すものである。

なおこのフィールドスタディプログラムは、主に国外において教員が同行指導して実施されるものである。一方国内において、学生が身近な地域社会で行われている市民活動や社会福祉施設で活動するものをコミュニティサービスラーニングとしている。人間社会学部では、この両方を合わせて体験学習と呼び、国際社会学科及び人間環境学科の専門特殊科目(選択)と位置付けている。全学の学部・学科とのこの体験学習との関係は図2に示した通りである。

図2: 恵泉女学園大学における(フィールドスタディ(体験学習))の位置



フィールドスタディプログラムの直接の目的は、率直に言えば「百聞は一見に如かず」である。近年さらに顕著になりつつある学力や学習意欲の低下や、携帯型ゲーム機や携帯電話等を通じたヴァーチャルな世界の浸透といった大学生を取り巻く現実に対して、外国の現場に身を置いてそこを専門とする教員から指導を受けながら相手と触れ合うこと、つまり五感全部を使って体験する機会を提供することで、改めて学習意欲を増幅させること、同時に異なる社会、人々、文化や宗教、環境などについて、自らの皮膚感覚で理解を深めることを目的としている。

2. フィールドスタディプログラムの構成と内容

本学のフィールドスタディには、短期フィールドスタディ(以下、短期FS)と、長期フィールドスタディ(以下、長期FS)の二種類が存在する。

2-1. 短期フィールドスタディ(以下、短期FSと表記)

短期FSは二年生以上を対象にしているので、国際社会学科(当時は国際社会文化学科)が創設された翌年度の1999年度に始まった。毎年5~8つの国で、大学の長期休暇期間中に10日間前後の長さで実施されている。2005年度から2009年度までの五年間に実施された短期FSとその参加者一数を、以下の表1に示した。この五年間に日本を含めた13カ国を、338名の学生が訪問している。平均で10名の学生が、それぞれに参加している。換言すると、長期・短期のフィールドスタディには、国際社会学会の二~四年生の15~20%程度が毎年度参加している。

表1: 過去五年間の短期FSの実施国(コース)と参加人数

年	2005		2006		2007		2008		2009	
国名	沖縄	14	沖縄	13	沖縄	8	カンボジア	12	カンボジア	8
	タイ	7	タイ	7	タイ	4	タイ	6	フィリピン	14

と参加学生人数	ドイツ	6	ドイツ	10	ドイツ	6	中国	7	中国	4
	NZ	16	NZ	14	I-nesia	7	NZ	23	オーストラリア	8
	BD	9	BD	12	BD	11	インド	4	BD	9
	フランス	12	フランス	12	フランス	8	フランス	13	フランス	12
			アメリカ	9	アメリカ	12	アメリカ	8		
		I-nesia	13							
計	6 コース	64	8 コース	90	7 コース	56	7 コース	73	6 コース	55

注1：NZ=ニュージーランド、BD=バングラデシュ、I-nesia=インドネシアのこと。

注2：この人数は新規参加の学生のみで、毎回数名いる複数回目の参加学生は含まれていない。

短期FSを担当する教員は主に国際社会学科の教員で、自分が専門としているフィールドに行くことを原則としている。換言するとこのプログラムは、しばしば他大学で見られる、大学によって機械的に引率・指導を担当させられ、知見も動機も希薄な状態で学生を引率するのではない。あくまで自分のフィールドの楽しさを学生と分け合う、という性格が強い。この学科の教員には人権、平和、ジェンダー、開発/貧困、NGOなど具体的な社会問題に関わるものが多く、その特色を活かしたフィールドスタディが実施されている。またここ10年間程の学科の教員の新規採用の条件に、フィールドスタディを実施できることを挙げており、大多数の教員が担当できるようになっている。

表2：短期FS実施国及びテーマ(07・08年度)

実施国・地域	テーマ
バングラデシュ	貧しさと豊かさに触れる
インドネシア	開発を現地で学ぶ
沖縄八重山	島人にとっての環境と開発、戦争と平和
アメリカ合衆国	「移民社会」と9.11以降の状況を考える
中華人民共和国	「新興大国」中国と向き合う
ドイツ	「生まれてきてよかった」、「生きていて良かった」と皆が思える社会を目指して
オランダ、ドイツ	ヨーロッパの宗教と音楽
タイ	移動と定住-オルタナティブで持続発展可能な生活を考える
ニュージーランド	農林業の国ニュージーランドで自然と人との関係を考えよう
フランス	パリのトポグラフィ、中心と周辺

短期FSは、表2に示したような担当教員が定めるテーマに従って内容が構成されている。

例えば過去五年間に四回実施されたバングラデシュの短期FSでは、日本のNGOが支援し現地NGOが実施している農村開発プロジェクトを3~4日間訪ね、その活動を見学することと、村人たちと様々な形で交流することが主要な柱となっている。参加学生はそれぞれ自分の調査テーマを定め、日本でのテーマに関する事前調査を行った上で、現地で同様な調査を行い、両者の結果を比較している。日本で事前調査をさせることで、調査の困難さを事前に理解するだけでなく、先進国と途上国という既成概念が崩れるきっかけになることがある。その好例の一つは、ある学生が行った日本とバングラデシュの子供の視力調査だ。両国の視力を比較すると、バングラデシュに比べて大差で日本が劣っていることが一目瞭然であった。もっとも参加学生の数が多く、しかも調査方法が時間のかかるものだと、通訳者の数や調査時間が不足するという限界が生じる。

またテーマではないが、訪問先のストリートチルドレンが立ち寄る施設では、恵まれない子どもたちに接するつもりだった学生たちが、日本にいじめや引きこもりなどの問題があると知らされたストリートチルドレンから、「そうした問題があるなら、なぜあなたたちはわざわざバングラデシュに来るのか」と問われ、学生が答えに窮したこともある。

2-2. 長期フィールドスタディ(以下、長期FSと表記)

長期FSは、北部タイの中心都市チェンマイ市にある国立チェンマイ大学との協定をもとにして、2000年度から実施している5ヶ月間のプログラムである。当初は3年生以上が対象だったが、就職活動時期が早まったことで参加者が減少したので、途中から2年生以上に変更した。

タイ側のカウンターパートは、このチェンマイ大学の教育学部の大学院ノンフォーマル教育研究科である。同研究科で学ぶ大学院生には、ユニークな経験をもつ社会人、特に行政機関や現地NGOのスタッフが含まれており、周辺地域にはそうした卒業生を含めた人的ネットワークが出来上がっている。本学の長期FSは、この研究科の教員や卒業生、そして村人の協力によって成り立っている。

具体的なスケジュールは、最初の2ヶ月間、チェンマイ大学で実践的なタイ語学習やタイ社会について学ぶ。その期間中に北部タイの農村や山岳民族の村へのフィールドトリップを行い、フィールドワークを実践し、自分達とは異なる文化・生活様式を持っている村での生活体験することで3ヶ月目から始まるフィールドでの体験学習に備える学習プロセスになっている。

その後の約2ヶ月間は、学生各自が選択した関心テーマ、例えば環境問題や、保健衛生/エイズ予防、女性や子どものエンパワメントなどに取り組んでいる現地のNGOや公的機関、住民組織でのボランティアワークなどを通して、体験学習を行う。昨2009年度までの10年間で、この長期FSの体験学習で学生たちがお世話になったタイの組織は51、参加学生は97名である。

このフィールドでの体験学習期間は3期に分かれており、各期での課題を、現地の人々と一緒に生活し、彼らが抱える問題を同じ目線で共有しながら考察していく。そして各期が終了する毎にチェンマイ大学に戻り、それぞれの経験を発表して互いに学びあう。体験学習3期を終えてから、学生たちは各自のテーマにしたがって最終レポートを仕上げる。最近二年間の参加学生のテーマと体験学習先は、下の表③に示した。長期FSプログラムの開始当初の体験学習先は圧倒的にNGOが多かったが、最近では村に住み込むものが増えている。

表3: 長期FSの1年半のスケジュール

4月～7月	準備授業(週1回)	「社会調査方法論Ⅱ」2単位
7月後半	「タイ語Ⅲ」(夏季集中) 既習者は聴講	「タイ語Ⅲ」 2単位
8月後半	出発直前講義(3日間) タイ、チェンマイへ出発 チェンマイでプログラム開始、合宿	
9月～10月 9月 10月	プログラム開始 オリエンテーション タイ語(午前中)、講義(午後) 農村フィールドトリップ(3泊4日) 山岳民族の村のフィールドトリップ	「FSⅡ(タイ語)」 2単位 「FSⅢ(地域実地講義)」4単位
10月後半～翌年1月	3期に分けて個々の体験学習 各期が終わる毎に中間発表会	「FSⅣ(課題研究1)」4単位
翌年1月	学生によるプログラム評価会 最終レポート提出	「FSⅤ(課題研究2)」4単位
翌年4月～7月	振り返り 報告書作成	「FSⅥ(ステップアップ)」2単位

表4: 2008, 09年度の長期FSの参加学生のテーマと体験学習先一覧

学生	体験学習テーマ	体験学習先
1	持続可能な農業、地産地消	有機農業グループがあるチェンマイ郊外の北タイ族が暮らすノンマジヤップ村
2	伝統医療、タイマッサージ	寺内でタイマッサージをオルタナティブ医療として提供する、チェンマイ郊外で北タイ族が多いファイキエン寺
3	高齢者の地域内でのケア	チェンマイ郊外の、北タイ族が暮らすファリン村
4	カレン族の伝統音楽	村内に初等教育を提供するコミュニティスクールがあり、カレンの文化を伝承しているモワキ村
5	共同体意識	メーホンソン県のカレン族のパヨイ村
6	人身売買、子供	チェンライ県で人身売買の被害者の子ども・女性のケアをするNGO、「メコン地域先住児童の権利の家」
7	民族衣装の模様	チェンライ県でタイ山地民問題解決に取り組んでいるNGO、ミラー財団
8	持続可能な農業、有機市場	チェンマイ郊外のドンチエン村で有機農業を振興しているNGO「維持

	開拓	可能な農業コミュニティ学院」
9	若者の居場所	チェンマイ郊外のノンジョム村で若者の問題に地域の若者自身が取り組んでいるロムレングループ
10	子どものしつけ、親子関係	チェンマイ郊外のカレン族が暮らすトゥンルアン村
11	中華文化の伝承、雲南人	チェンライ県で中国雲南からの移住者が暮らすメサロン村
12	問題を抱えた子ども	チェンマイ市内で児童労働を防ぐためストリートで働く子どもにシェルターを提供したり、性産業で働く女性のエンパワメントもしているNGO「ガーデン・オブ・ホープ(希望の庭)」
13	少女の社会問題	チェンマイ郊外に農村の教育・開発財団NGOが設置・運営する「若い女性開発センター」
14	子どものケア	チェンライ県で人身売買の被害者の子ども・女性のケアをするNGO、「メコン地域先住児童の権利の家」

なおチェンマイ近辺には日本人が中心となっているNGOが数団体存在するが、本学の体験学習はそうしたNGOではないところで体験学習をさせている。チェンマイ大学が直接体験学習のアレンジや学生の指導をすること、学生がタイの社会に日本人を介さずに直接的に触れ合うこと、その上で学生が相手側の視点を理解することや外者である自分の役割を意識すること、などを重視にしているからだ。

本学はこの長期FSを実施するために、このチェンマイ大学教育学部大学院ノンフォーマル教育研究科を修了した本学の教員1名をチェンマイに配置して、24時間連絡可能な体制で学生を指導・ケアしている他、長期FS開始当初の数週間は、学生の生活を支援するアシスタントを付けている。また体験学習期間中に三度、学生がフィールドから戻って行われる報告会には、本学から教員がチェンマイに出張して指導を行うように努めている。

3. フィールドスタディのカリキュラム

本学のフィールドスタディのカリキュラム面での特徴は、以下の三点である。

- 1) 繰り返しになるが、短期・長期のフィールドスタディとその関連科目の全てが、人間社会学部の専門科目であること。
- 2) 表3に示したように、全ての短期・長期のフィールドスタディには、1科目2単位の事前学習、体験学習(短期は1科目で2単位、長期は4科目で14単位)、1科目2単位の事後学習によって構成されており、原則同じ教員が担当する。なお長期FSをFSⅡ～Ⅴの4科目としているのは、その五ヶ月間の期間中に病気等の理由で体験学習を中断せざるを得なくなった学生に、それまでの成果を認めるための工夫である。
- 3) 小規模大学ながら第2外国語は、アジアの5カ国語を含めた9カ国語があり、それらの国々でFSを実施するのが原則であること。
- 4) フィールドスタディ参加後、その担当教員が担当する専門科目でさらに学びを深められること

4. フィールドスタディの組織体制

学部の教務委員会の下部組織である体験学習CSL・FS委員会が全体を統括、管理し、専門職(体験学習CSL・FS主任)を配置し、事務体制は主に教務課が対応している。

また海外における正規の教育プログラムを安全に実施するために、危機管理体制の充実を図っている。具体的には、学生に対する事前の健康管理指導、期間中と事後の健康チェック、実施期間中に緊急事態が発生した場合に現地に応援に駆け付ける人員の確保、大学と参加学生による海外旅行傷害保険への二重加入、学生健康管理室が用意する基礎的医薬品の携行などである。

5. その他の特徴

以上書き込めなかった本学のフィールドスタディのユニークな特徴として、以下の4点を挙

げておきたい。

1) 現地のカウンターパート（NGO、住民組織、大学等）との創造的・持続的關係構築

本学はこのフィールドスタディ開始当初より、送り手の教育の都合でツアーを実施し、受入側とは経費支払いまでの一方的な関わりではなく、現地との創造的相互関係を築くことを重視してきた。この背景の一つは、筆者がツアーを受け入れるNGOに所属し、その負担の重さや意味への疑問を感じてきたことがある。

特に長期フィールドスタディでは、学生をフィールドで受け入れてくれる期間が2ヶ月間で数年にも及ぶので、本学と受入れ団体のコミュニケーションを充実させるだけでなく、受入れ団体側の充実に資する努力を行っている。具体的には、国立チェンマイ大学大学院で学ぶNGOワーカーへの奨学金の提供、受入先のNGOや住民組織のリーダーの視察旅行や会議参加の費用負担などである。その一環としてこれまでに3回、チェンマイ及びその周辺の関係NGOスタッフ10名ほどが、本学の短期FSに参加し、バングラデシュで農村開発を目指す現地NGOと交流を重ねた。またその結果として、バングラデシュでの受け入れNGOが、一週間ほどチェンマイのNGOを訪問し交流を行った。また自分が世話になった住民組織に、学生や卒業生が資金支援を行ったケースもある。

また2007年には現地受入れ団体側からみた「フィールドスタディ」というテーマの国際シンポジウムを本学で行い、ほとんど語られることがなかった受入先の見えにくい配慮や負担の重さなどを語り合った。受入関係者からは、「学びに来るより、学んでから来てほしい」、「急な要請に応じて受け入れたが、そのための準備が不十分で、担当スタッフが事故死したケースがある」と言った事が率直に語られた。

2) 保証人との信頼關係の構築

長期FSにおいては、娘が5ヶ月間見知らぬ国に滞在することなどに対する心配が保証人や家族に生じる。このため、事前の説明会や事後の発表報告会などへの参加予定者の保証人・家族の参加を促し、大学と保証人・家族との人間關係の構築に意識的に務めている。長期FSの期間中にタイに滞在中の娘を訪ね、現地で行われる報告会に参加し、娘の発表を聞いたり、世話になっている体験学習先を訪問することで、親自身がこのプログラムから学ぶことも多々である。また短期FSの期間中は、東京の本学担当者が、24時間携帯電話で問い合わせなどに応じるようにしている。

3) 本学のフィールドスタディの経験を土台とした社会貢献

2006年度に本学の体験学習プログラムが特色GPに採択されたことを背景に、以下を通じて社会的に貢献した。

- ① 2006年度に関東地区の大学の人文系学部における海外体験学習の実態調査を行い、半数程度の大学が同様なこうしたプログラムを行っていることを明らかにした。この種の大規模調査はそれまでに行われたことはないので、本学や他大学にとってこのプログラムを一層改善するために重要であるばかりでなく、大学教育や外交關係の政策担当者にとっての貴重なデータベースとなったはずである。
- ② 同年に危機管理セミナーを学外で実施し、百名近い参加者と本学フィールドスタディで構築した危機管理体制をシェアするとともに、旅行業法、旅行傷害保険、海外医療等の専門家を招いて、危機管理に関して広く学ぶ機会を提供した。
- ③ 2007年に、先に述べた受入側のインパクトに関する国際シンポジウムをドイツ、タイ、バングラデシュからのゲストを招いて学内で開催し、200名ほどの参加者を得た。

4) 大学共同の研究会

本学が中心的な呼びかけ、2005年度から毎年1~2回、全国の5~8大学と共同で「大学教育における海外体験学習研究会」を継続的に実施している。多くの大学で、こうした学生の海外体験の提供が実施されているが、専門的担当者を置かず持ち回りで行われているか、変わり者の教員の趣味的なものとして行われているという現状の中で、貴重な学びの場となっている。なおこの研究会の代表者は、筆者が務めている。

6. まとめ：フィールドスタディでグローバル市民は育成されたのか？

当初に述べたように、このプログラムの最終目的は「専門性をもった教養教育によるグローバル市民の育成」であるので、その成否はどれだけ「グローバル市民」を育成することが出来たか

によって判断されることになる。換言すると、教養教育である以上他の大学のプログラムのよう
に何人の専門家を輩出したといった形ではなく、職場や家庭、地域での日常生活の中でガイジン
や異文化・異宗教に偏見を持たない、あるいは親しみを感じるという成果を期待している。しか
し、この成果の測定は、詳細な意識調査等を行わない限り把握が困難であるので、本学が関知し
ている事例を数例述べることでまとめに代えたい。

フィールドスタディを履修した卒業生の中からは、JOCV の隊員や NGO にボランティアとして活
動した後に、JICA の専門家、開発 NGO やフェアトレード団体のスタッフとなったものが 10 名前
後いる。またそれらと一部重複するが、国内や英米、そしてチェンマイの大学院や現地の専門学
校に進学して、地域研究や社会学、国際開発学、現地の言語等の分野を専攻した/しているものも
10~20 名程度いる。

こうした目立ったものではないが、長期 FS では卒業後も体験学習先と連絡を取り合い良い関係
を継続している学生が多数存在している。具体的には、体験学習先 NGO の活動を資金やその他
の形でサポートしたり、村の稲刈りを手伝いにわざわざ日本からやってきたり、自分の親や結婚
相手、子どもを連れて現地訪問しているものが少なくない。またタイやインドで就職している卒
業生は、正確な数は把握困難だが 20 名程度おり、そのうち数名はタイ人と結婚生活を営んでいる。

短期 FS の参加者の状況把握は先に述べたように困難だが、例えば近年さらに増加しているアジ
ア諸国からの人に日本で出会ったときに、その国を訪ねたことがあると伝えたり、覚えていた簡
単な日常会話を使って喜ばれた、という個人的経験に接することは少なくない。また 2001 年以降
イスラーム教に対する偏見が高まっているが、日本を除く 12 カ国の短期 FS 実施国の内インドネ
シアとバングラデシュはイスラーム教徒が大多数であり、アメリカやドイツ、フランスなどの短
期 FS でも、それらの国に暮らすイスラーム教徒と積極的に接触している。こうした体験を通じて、
イスラームや異宗教に対する偏見や違和感を持たない市井の民を輩出している、と確信している。

(以上)